

## 第4期 平成30年度 新宿区多文化共生まちづくり会議 第3回全体会 議事概要

日 時 平成31年1月31日（木）9:30～11:30

場 所 区役所本庁舎6階 第2委員会室

出席委員 毛受委員、稲葉委員、小林委員、郭委員、長谷部委員、田中委員、岩澤委員、申委員、李（香）委員、パウデル委員、奥田委員、ドゥラ委員、鈴木委員、栗原委員、金（朋）委員、盛委員、安藤委員、李（承）委員、那波委員、本多委員、平野委員、國谷委員、井上委員 23名

欠席委員 張委員、金（勲）委員、センブ委員、朴委員、江副委員、ディンマイ委員、植木委員、伊藤委員、内田委員 9名

### 1 開会

### 2 会長あいさつ

### 3 議事

#### (1) しんじゅく多文化共生プラザの運営体制等について

事務局から説明があった。

#### (2) 新宿区における日本語学習支援について

事務局から説明があった。

長谷部委員より、多文化共生社会における日本語教室が果たす役割について説明があった。

- ・来日前に日本語を勉強したものの、教科書の日本語と日常会話で使う日本語は違うため、戸惑った。日本語については学校で教えてもらったが、日常生活についてはアルバイト先の先輩や日本人の友人から教えてもらった。また、日本の生活ルールを知った後も、習慣づけるまでには時間がかかった。日本で暮らすようになり、コミュニケーションの重要性を感じている。コミュニケーションを重ねていけば、信頼関係が生まれ、わからないこと困ったことがあったときにサポートし合える。コミュニケーションをとるために、日本語は大切な要素である。
- ・来日したばかりの頃はほとんど日本語が話せなかったため、苦勞した。しかし、日本に住んでいる親戚がいたため、日本語がわからなくても、生活のルールについて教えてもらうことができた。日本語は日本語教室や日本語学校等で学べるが、実際に日本人と接する機会が少ないと感じる。
- ・留学生として来日し、その後、日本人と結婚した。日本で出産した際には日本語教室のボランティアに病院に付き添ってもらったり、食事を作ってもらったりとお世話になった。そうした人の存在は、安心感が大きく、心の支えであった。日本語教室が果たす役割は日本語習得だけではなく、人との繋がりを生むことである。
- ・座学の日本語教室だけではなく、簡単な日本語を使いながら参加できる活動があると良い。
- ・外国人の大学院生は、大学が提供した日本語学習支援より、地域のボランティアによる日本語教室が

役に立ったと言っていた。文法を習うのではなく、日常生活の場面に応じた日本語を習ったそうである。全国的にボランティアの高齢化が問題視されているため、区も継続して養成に取り組む必要がある。

- ・子どもがいる外国人は日本語学校に通うことが難しいため、託児付きの日本語教室が地域と繋がる役割を果たしている。教室では学習者同士が仲良くなったり、子育ての情報交換をしたり、ボランティアが学校からのお便りを訳したりと、学習以外の効果も高い。しかし、文法や漢字をあまり教えないため、日常会話から先のレベルに進みにくい。日本語教室間で連携できたら、学習レベルや通いたい曜日を選べるなど、学習者の選択肢が広がる。
- ・教室の時間帯に都合がつかない外国人もいるので、オンライン上に学習教材があげられると良い。
- ・外国人を支援する体制が整っていても、そのことを知らずにいたり、忙しくて利用できない人もおり、日本人や地域社会との接点を持ってない。そうした人たちに外国語で作成されたチラシを届けたり、町会へつないだりするボランティアがいると良い。
- ・町会加入の誘いはこれまでもしているが、加入率が上がらないのが現状である。時間はかかるが、引き続き勧誘していきたい。
- ・情報もサービスも、自ら探そうとする主体性のある人には届くが、それ以外の人には届かない。少しでも目に触れる機会を増やす必要がある。外国人がよく利用する場との密な連携が有効である。
- ・日本語教室を、言語習得と人間関係の構築に分けて考えたい。言語習得という面から、オンライン学習ができるシステムを構築するよう提案したい。内容は学習者が必要に応じて選べるよう、テーマ毎に分けて作成すると良い。
- ・日本語学校に通う留学生のなかでは、アルバイトをしている学生ほど、日本人との接点が多いため、会話の上達が早い。また、学校単位で地域清掃を始めたところ、留学生が地域の方から日常的に声をかけてもらう機会が増え、雰囲気が変わってきた。出入りが多い外国人をどのように地域につないでいくのが課題である。行政だけでなく、まちのなかの日本語学校や商店などが、日本語教室や外国人相談の情報を把握し、案内できるような窓口になれると良い。養成講座を修了するのに時間がかかる日本語ボランティアのほかに、もう少し気軽に支援に係われる仕組みが必要である。
- ・留学や仕事など目的がはっきりしている外国人は、日本語を習得していく。しかし、目的がなく日本にいて、日本語がなくても暮らしていただける環境にいる外国人はどうか。自然には日本社会と接点を持つことがない、そうした人たちこそ日本語教室を通じて地域へつなげる必要がある。ボランティアとの人と人とのつながりやコミュニケーションが地域の日本語教室のインセンティブになるため、この先、人手不足が予想されるボランティアをどのように確保していくかの戦略が必要である。
- ・日本語を必要としない人でも参加したくなる、日本語に触れる機会として、やさしい日本語で楽しむ料理やスポーツの講座を開いてはどうか。地域交流を目的としたNPO等との連携も有効である。
- ・自分の店を持つときに商店会に加入したことで、様々な情報を受け取ることができるようになった。

- ・日本語がある程度話せるようになっても、日本生活のルールやマナーは学ぶ機会がないため、日本語ができるようになってもルールやマナーが守られないという課題が残る。来日したばかりのときに研修を受ける機会があると良い。
- ・外国人委員の意見を聞いて、生活に係わる細かな困りごとについて教えてくれる、相談できる身近な人が必要であることを感じた。既存の日本語ボランティア養成講座に、そうしたサポートができるようなカリキュラムを加えられないか。また、ボランティア制度を、養成講座をすべて修了するコースと気軽にサポートに加われるコースの二つに分ければ、ボランティアのすそ野を広げることができる。

### (3) 次回以降の日程

事務局から第4回会議の日程（平成31年3月22日）について説明があった。

### (4) その他

## 4 閉会